

ベトナム北部窯跡表採の陶磁器

— 日本出土ベトナム陶磁器の生産地を探る —

菊池誠一・江川真澄・小野田恵・渡部マリカ・吉田泰子

1 はじめに

近年、日本の中世・近世遺跡からベトナム陶磁器が出土し、国内外の研究者の関心をあつめている。わが国で出土するベトナム陶磁器の初現時期は14世紀のことであり、九州の対馬や壱岐、大宰府遺跡などから、中国陶磁器や朝鮮陶磁器と共伴し、青磁や白磁、褐釉、鉄絵などが出土している。ベトナム陶磁器がどのような経路で、わが国にもたらされたのか。わが国と東アジア・東南アジア中世の海外交易の実態を考えるうえで興味がつきない。

一方、生産地側では、ベトナム人研究者による窯跡調査や陶磁器の研究がすすみ、中世の海外輸出用陶磁器の一端がようやく明らかにされつつある。しかしながら、ベトナムでは窯跡と出土陶磁器の実態を詳細に報告した事例はまだなく、海外研究者にとっては資料化された実測図などにあたって研究することができない状況下にある。

筆者らは、ベトナム陳朝(1225～1400年)から黎朝(1428～1789年)時代の貿易品としてのベトナム陶磁器をめぐるこうした研究状況から、わが国で出土したその生産地と陶磁器の様相を探る目的で、2005年3月に、菊池誠一、半田素子(本学大学院修了)、江川真澄(本学大学院生)、小野田恵(立正大学卒、現本学大学院生)、吉田泰子・岡野佐知子(本学日本文化史学科学生)が訪越した。そして、ハノイ国家大学と共同で北部の窯跡群を踏査し、そのおりに表採した資料の一部をここに報告し、おおくの研究者にその資料を提供するものである。また、資料整理にあたっては上記の者以外に渡部マリカ(本学大学院生)が参加した。

なお、調査は、平成16年度大学教育高度化推進特別経費(課題名:東南アジアの文化遺産をめぐる共同研究と国際教育の実践)(責任者:菊池誠一)の助成をうけ実施した。

2 北部の陶磁生産地 (図1, 2)

ベトナムの陳朝から黎朝の時代は、北部で陶磁器生産が盛んにおこなわれ、海外にも輸出された時代である。陳朝から黎朝時代の窯跡は、1980年代後半からベトナム考古学院やハノイ国家大学、各省の博物館で調査が実施されてきた。現在のところ確認されている窯跡群は、ハノイ(Ha Noi)市やハイズオン(Hai Duong)省、バクニン(Bac Ninh)省、ナムディン(Nam Dinh)省、クアンニン(Quang Ninh)省などである¹⁾。

このうち、筆者らが踏査した遺跡は、ハイズオン省にあるヴァンイエン(Van Yen)とチューダオ(Chu Dau)、フンタン(Hung Thang)、ゴイ(Ngoi)、ラオ(Lao)、カイ(Cay)、バートゥイ(Ba Thuy)、ホップレー(Hop Le)の各窯跡である。このうち表採できた遺跡はヴァンイエンとカイ、ホップレーであり、これらについて報告し、わが国で出土するベトナム陶磁器とのかかわりについて若干の考察をする。

3 ヴァンイエン窯跡表採陶磁器 (図3)

窯跡は、省都ハイズオン市から北西30kmのチーリン(Chi Linh)県フンダオ(Hung Dao)のトゥオン(Thuong)川の左岸にひろがる。

この遺跡は省博物館などが1984年と87年・89年・96年に発掘調査した²⁾。発掘調査の結果、遺跡の上層で15～16世紀

の黎朝の特色をもつチュエダオ（Chu Dau）様式の青花が出土し、下層から13～14世紀の青磁、褐釉磁、内白外褐磁、青花などの碗皿類が出土した。

今回、ヴァンイェン窯跡で表採した陶磁器は、青磁や白磁、褐釉磁であり、他に中国陶磁器が少量みとめられた。ベトナム陶磁器は表採資料とはいえ、本遺跡で生産された可能性がたかい。

1～11はベトナム青磁である。

1は印花文碗の口縁部破片で、口径は約17.6cmである。胎土は灰白色で精緻、焼成は良好である。黒色粒子を若干含む。釉はオリーブ色で、内・外ともに貫入がありムラがみられる。内面には花文が施されており、外面には轆轤目がみられる。

2は印花文碗の口縁部破片である。胎土は灰白色、内面には花か植物と思われる文様がみられ、外面ともに部分的に灰緑色をおびている。口縁部には二箇所の重ね焼き痕があり、口縁の色は全体的に茶色味をおびている。

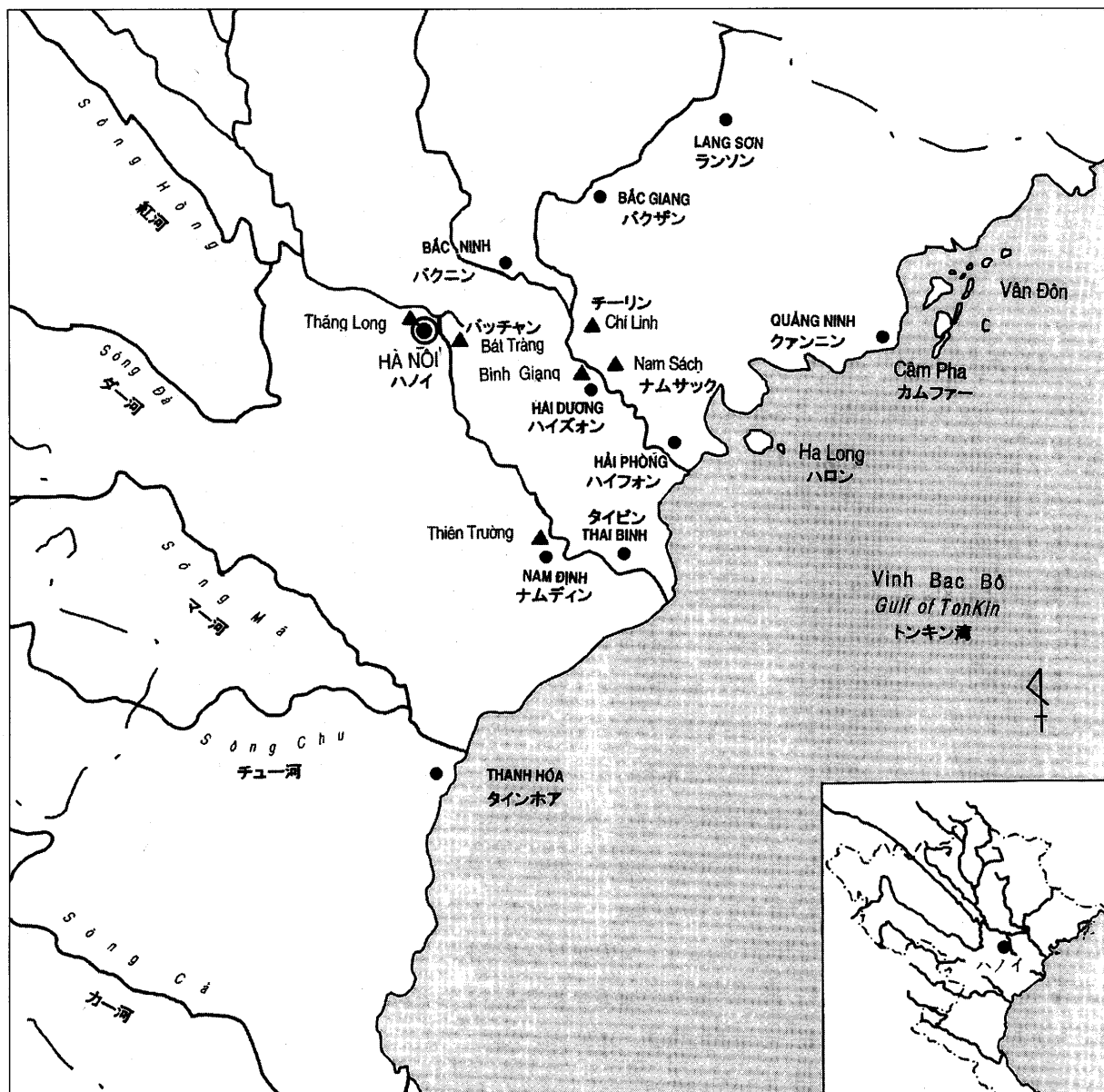


図1 ベトナム北部青花磁器生産地（GOM HOA LAM VIET NAM より一部改変）

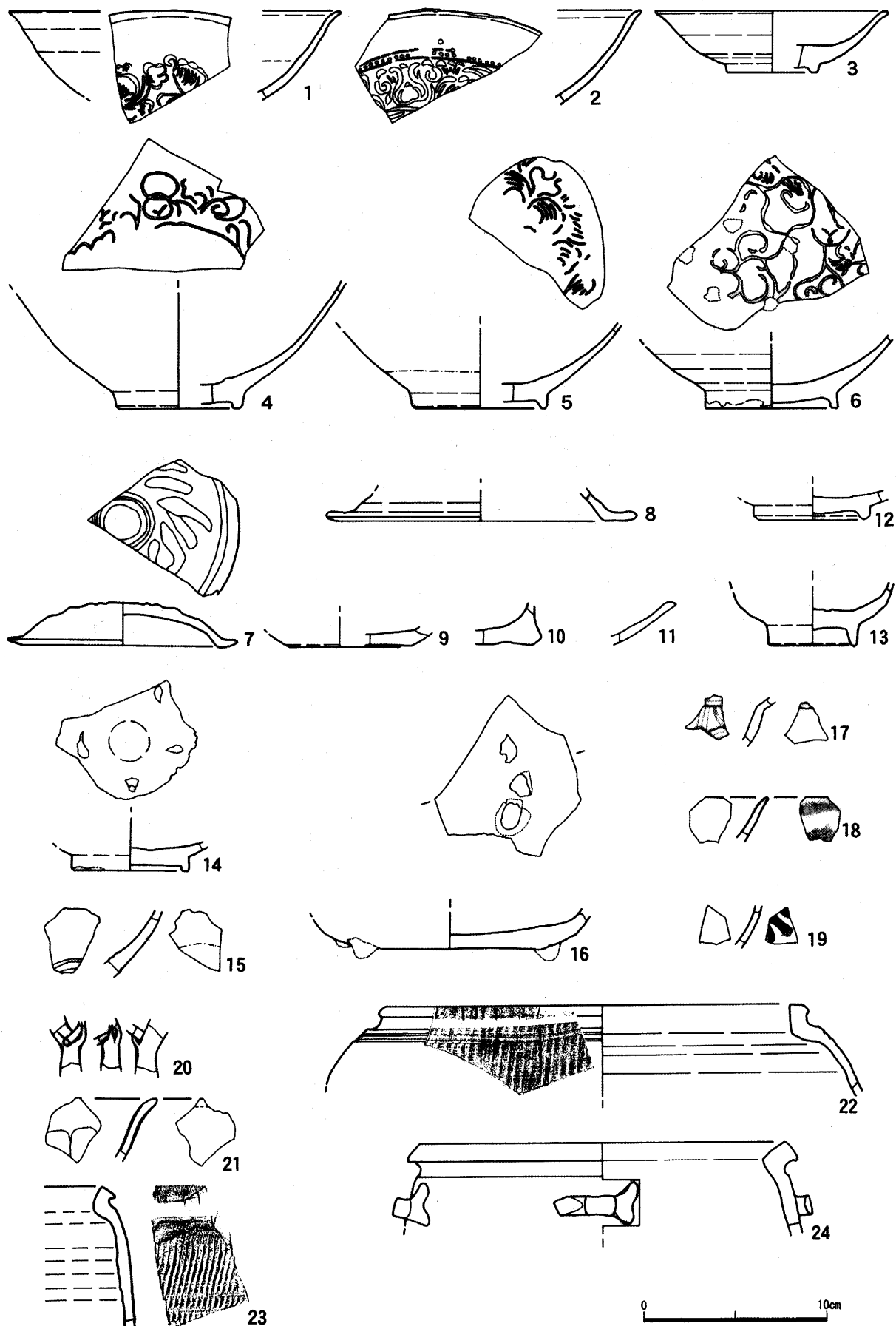


図3 ヴァンイェン表採遺物

3はやや浅底の碗の破片で、口径は約11.4cm、器高約3.3cm、高台径約4.8cmである。胎土は灰色と灰白色がマール状になり、黒色粒子を含む。釉は緑灰色だが、かなり剥落している。

4は印花文碗の底部破片で、高台径は約6.4cmである。胎土は灰白色で精緻、黒色粒子を含む。器厚は0.3cmと薄く、口縁部が外反する碗であろう。釉は全面的に剥落している。見込みには型押しによる唐草文が施されている。また見込みに窯壁の付着がみられる。

5は印花文碗の底部破片で、高台径は約7.2cmである。胎土は灰白色で緻密、黒色粒子を含む。高台内は無釉である。

6は印花文碗の底部破片で、高台径は約7cmである。胎土は灰色で黒色粒子を含む。釉は内面・外面ともに緑灰色であり、高台の途中まで施釉され、文様は唐草文が内面のみ施されている。見込み部分には降灰痕があり、5箇所の目跡もみられる。高台内と畳付けはともに無釉である。

7は蓋の破片で、口径は約10.6cm、器高約2.3cmである。胎土は灰白色で精緻であり、黒色粒子を含む。釉は緑灰色を呈する。外面には丸棒状工具を用いて施文したと思われる文様がみられる。

8は蓋と思われる破片で、口径約13.2cmである。胎土は灰白色で精緻、黒色粒子を含んでいる。多少空隙を含む。釉は茶色味をおびた緑色を呈している。口縁部には釉を拭った跡がみられ、釉が薄くなっている。内面に釉だれがみられる。器面には貫入がみられる。

9は碗の底部破片である。胎土は灰白色で精緻、黒色粒子を含んでいる。釉は灰色がかった緑色である。釉の剥落がみられる。

10は壺、もしくは瓶の底部破片と思われる。胎土は灰白色と黄土色がマール状になっており、精緻である。緑灰色をおびた透明釉で、ムラがある。底部も一部施釉される。

11は碗の口縁部破片である。胎土は灰白色で、精緻、黒色粒子を含んでいる。多少空隙を含む。釉は緑がかった灰色である。口縁部に釉の剥落がみられる。

12・13はベトナム白磁である。

12は碗の底部破片で、高台径は約6.2cmである。胎土は黄色をおび、黒色粒子を含む。見込みは蛇の目釉剥ぎで、一部溶着痕が残存する。器面には貫入がみられる。

13は碗の底部破片である。高台径は約4.4cmで狭く、高い。胎土は灰白色と黄土色がマール状になっており、精緻で黒色粒子を含む。緑味をおびた透明釉で、全面に貫入がみられる。また見込みに重ね焼きの痕跡がある。

14・15はベトナム褐釉磁器である。

14は碗の底部破片で、高台径は約6.2cmである。胎土は一部に黄色の混じる灰白色で精緻、また黒色粒子を含む。釉は黒色に近く発色している。釉はまだらにかかり、高台にも釉だれがみられる。見込みに目跡が4箇所みられるが、その位置からして本来5箇所であったと思われる。高台内に右回転の轆轤痕がみられ、高台下部には工具痕がみられる。

15は碗の胴部破片である。胎土は少し黄味がかった白色で、精緻である。内面見込み付近に溶着痕がみられ、外面高台付近にはケズリがみられる。

16は皿の底部破片である。胎土は灰色だが、やや橙色も混じり黒色粒子を多く含む。釉は暗オリーブ色で内面は施釉され貫入がみられる。底部は無釉で若干赤みをおび、底部周囲には釉が玉状になっており、その部分は色が濃くなっている。また見込み部分の釉は部分的に剥がれており、形状から目跡とも考えられるが均一でないため不明である。降灰痕がみられる。

17～19はベトナム青花である。

17は碗、または鉢の胴部破片と思われる。胎土は一部に黄色の混じる灰白色で、精緻である。器面に貫入がみられる。文様は不明である。焼成は良好で、呉須は濃く発色している。

18は碗の胴部破片と思われる。胎土は灰白色で精緻である。釉はくすんだ透明釉であるが、呉須の発色は良好である。貫入がみられる。

19は碗の胴部破片であると思われる。胎土は灰白色で精緻である。釉はやや灰色をおび、くすんだ透明釉である。呉須の発色は良好である。

20・21は中国磁器である。

20は人形の手首部分の破片である。胎土は灰白色で精緻である。薄青色をおびた透明釉で、貫入がみられる。手には花を握っていたか。

21は碗の口縁部破片である。胎土は灰色で精緻、白色粒子を含む。内面に蓮弁がみられる。

22～24はベトナム焼締陶器である。

22は壺の口縁部破片で、口径は約20cmである。胎土は緑灰色からにぶい橙色がマーブル状になっており、精緻である。焼成は良好で、外面はにぶい橙色を、内面はにぶい褐色を呈する。外面にはいわゆる「縄簾紋」が施されており、肩部には緩やかで浅い沈線が2本みられる。

23は壺の口縁部破片である。胎土は橙色で精緻、橙色粒子を含む。外面にはいわゆる「縄簾紋」が施されている。また横方向のヘラ状工具による調整痕がみられる。

24は四耳壺の口縁部破片で、口径は約19.6cmである。胎土は灰赤色で精緻、白色粒子を含む。外面は赤褐色、内面は暗赤灰色をそれぞれ呈する。口縁部の断面は三角形であり、耳は横位に貼り付けられている。

4 カイ窯跡表採陶磁器 (図4-25, 26)

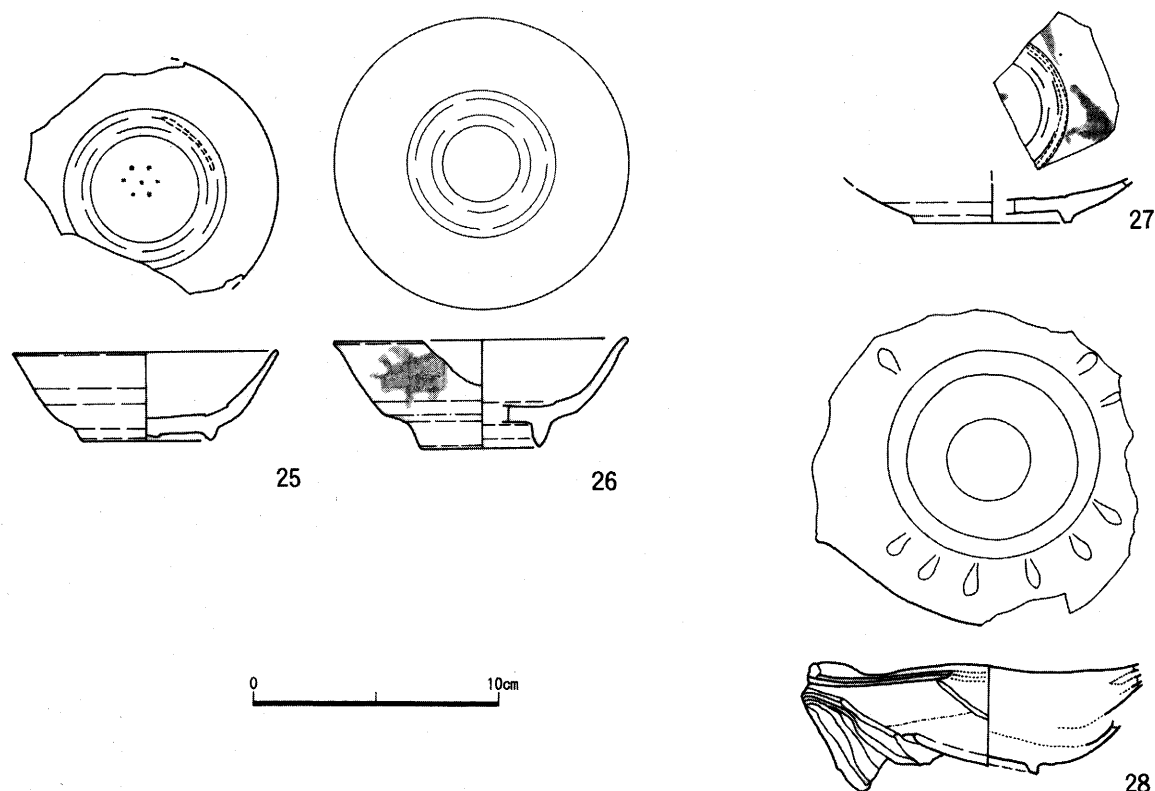


図4 カイ，ホップレー表採遺物（25・26カイ，27・28ホップレー）

ハイズオン省の南西に位置するビンザン（Binh Giang）県は、ハイズオン市の南西約12kmに位置し、この地域には青花などを生産したラオヤゴイ、カイ、バートゥイ、そしてホップレーの窯跡が知られている。

カイ窯跡は1984年に発見され、86年・89年・90年に発掘調査され、多数の陶磁器と生産用具などが検出された³⁾。おもに青磁や褐釉磁、白磁、青花などを生産し、褐釉磁と白磁は15世紀前半代のもの、青花は15世紀後半から18世紀代のものがみとめられるという⁴⁾。ここに紹介する資料は、白磁と青花である。



写真1 ヴァンイェン窯跡



写真2 カイ窯跡



写真3 ホップレー窯跡



写真4 トゥオン川

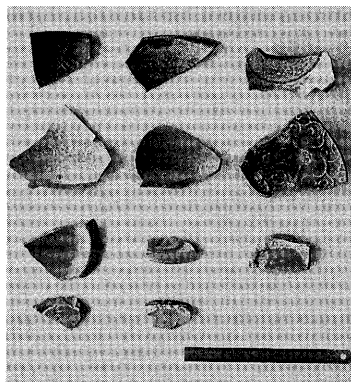


写真5 ヴァンイェン遺物（内面）

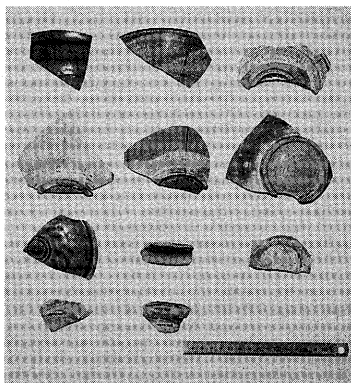


写真6 ヴァンイェン遺物（外面）

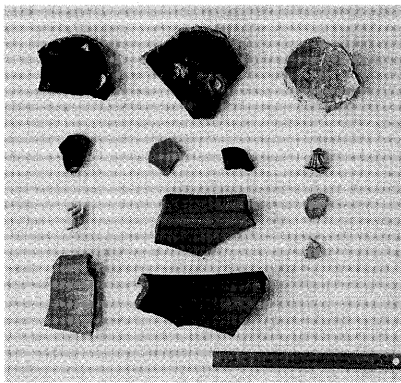


写真7 ヴァンイェン遺物（内面）

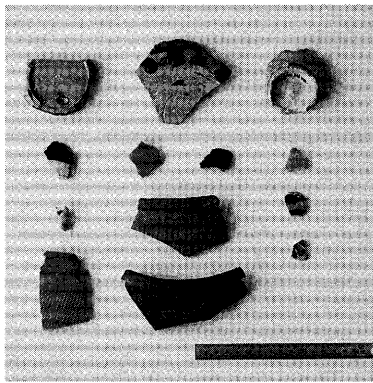


写真8 ヴァンイェン遺物（外面）

25はベトナムの白磁碗で、口径は約10.4cm、器高約3.5cm、高台径約5.0cmである。胎土は灰白色で、黒色粒子を含む。釉は灰緑色を呈している。見込みは蛇の目釉剥ぎで、中央部には菊花文が退化したような7個の点による文様が施されている。また蛇の目釉剥ぎの部分に、重ね焼きによる溶着痕がみられる。器面には貫入がみられる。

26はベトナムの青花碗で、口径は約11.4cm、器高約4.3cm、高台径約4.6cmである。胎土は灰色で粗く、空隙を含んでいる。25の碗に比べて高台が狭く、高い。また口縁部がやや外反している。灰色をおびた透明釉で、呉須はにじんでいるため、文様は不明である。また見込みは蛇の目釉剥ぎである。

5 ホップレー窯跡表採陶磁器 (図4-27, 28)

ホップレー窯跡は、ケーサット (Ke Sat) 川の支流であるドーダイ (Do Day) 川の右岸に位置している。

遺跡は1984年に発見され、86年・87年・89年に発掘調査された⁵⁾。こうした調査によって陶磁器や生産用具、窯跡の床面も検出された。ホップレーの製品は、おもに青磁、褐釉磁、青花、白磁からなる。褐釉磁と白磁は15世紀のもので、青磁は16世紀前半から大量に生産されたという。青花のなかで幅広の高台をもち、体部や見込みに菊花を施したものは、17世紀後半から18世紀前半におおく生産されていたという⁶⁾。

ここに紹介する資料は、青花と青磁である。

27はベトナムの青花碗の底部破片で、高台径約6.2cmである。高台が低いという特徴をもつ。胎土は灰白色で精緻、黒色粒子を含んでいる。見込みの文様は不明である。また見込み中央部に花文が退化したと思われる点が描かれている。緑色をおびた透明釉で、貫入がみられる。呉須は見込み中央部のみ藍色で、その他は黒色がかって発色している。見込みは蛇の目釉剥ぎで、溶着痕もみられる。

28はベトナム青磁皿で、溶着資料である。胎土は灰白色で黒色粒子をわずかに含むが、粒子は粗い。溶着している皿は破損しているものや、口縁部がごくわずかに残るものも含め全部で八枚である。釉は緑灰色、見込みは蛇の目釉剥ぎで一重の圈線がめぐる。また高台部分とその周囲は無釉である。文様は上の一枚しか確認できないが、内面の圈線の周囲に施されている。各皿の重なり具合から、焼成時には重ね積みをして一度に焼いていたことがわかる。完成品ではないため釉が部分的に溶けて溜まっており、降灰や内面には焦げ跡など多くみられ、窯が存在していたことを改めて裏付ける資料である。

6 ま と め

ヴァンイェン窯跡やカイ窯跡、ホップレー窯跡で表採した陶磁器を報告した。このなかで、ヴァンイェン窯跡で表採したベトナム青磁や白磁、褐釉磁は、わが国で出土したベトナム青磁や白磁、褐釉磁の生産地を考えるうえで重要な資料である。

現在までのところ、ベトナムにおいて14～15世紀の青磁や白磁、褐釉磁を焼いていた窯は、ハノイのダイラ (Dai La) 地区と郊外のバッチャン (Bat Trang)、ナムディン省の古都ティエンチュオン (Thien Truong)、そしてヴァンイェンの遺跡で確認されているだけである⁷⁾。

ヴァンイェン窯跡は、トンキン湾にそそぐタイビン (Thai Binh) 川の支流であるトゥオン川左岸にあり、他の窯跡の立地とくらべるならば、トンキン湾に存在した対外貿易港ヴァンドン (Van Don) に近い⁸⁾。また、この遺跡のあるハイゾン省には、黎朝時代に青花や色絵を大量に生産したチューダオ窯が存在し、その製品が海外に輸出されていたことが近年の沈没船引き揚げ品によって判明している⁹⁾。タイビン川流域のこの地域が貿易品としてのベトナム陶磁器を生産していた拠点のひとつと考えられるのである。その意味からも、わが国で出土するベトナム陶磁器の生産地のひとつとしてヴァンイェン窯製品の存在を考える意義があろう。生産地・消費地遺跡出土のベトナム陶磁器の科学的分析を含めた詳細な観察が今後の課題となろう。

註

- 1) Bui Minh Chi, Kerry Nguyen Long 2001 *Gom Hoa Lam Viet Nam*. Nha xuất ban Khoa hoc Xa hoi.
- 2) Tan Ba Hoanh 1993 *Gom Chu Dao*. Nha xuất ban The Gioi.
- 3) 註2) と同じ。
- 4) 註1) と同じ。
- 5) 註2) と同じ。
- 6) 註1) と同じ。
- 7) 註1) と同じ。
- 8) 阿部百里子 2003「ベトナムの貿易港ヴァンドンの発掘調査とその研究」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』152-155頁。
- 9) 菊池誠一 1998「ベトナム中部の沈没船引き揚げ陶磁器」『貿易陶磁研究』No.18。

(本文中と註のベトナム語表記は、その声調記号と発音記号を省略した。)

(きくち せいいち 歴史文化学科)

(えがわ ますみ 生活機構研究科生活文化研究専攻2年)

(おのだ めぐみ 生活機構研究科生活文化研究専攻1年)

(わたなべ まりか 生活機構研究科生活文化研究専攻2年)

(よしだ やすこ 日本文化史学科4年)